

## 本書の発行にあたって

この人が話す言葉によけいな口をさしはさむことはできない。許されない。ただひたすら虚心坦懐にその口から紡ぎ出される言葉に耳を傾け、絶対に聞き逃すわけにはいかない。こうした不思議な感覚と緊張感を抱かされた唯一と自覚している人物が林金次（はやし・きんじ）さんである。

その林さんは本年（2020）の1月24日、突然、亡くなられた。林さんは昭和5（1930）年2月28日の生まれで、満年齢89歳。90歳を目前にして往生された。本当に突然で、当日もお元気で話をし食事もして、その後に入ったお風呂で亡くなられたという。林さんにはもっと長生きしていただいて、いろいろと薫陶をいただきたかっただけに誠に残念至極である。その反面では、正直、それこそ死ぬまでお元気で見事な人生を送られたとも思う。いかにも林さんらしい生き方であり、逝き方であった。

林さんは「洗心道場」を主宰する立場におられたが、だからといってそこで道場主として弟子たちを前に説教をもつばらにしているようなことはまったくなくない。「洗心道場」の周りには田んぼや畑は、自らのものに加えて耕作困難となり委託されたものも含めて耕作・管理しており、朝早くから夕方まで、ひたすら農作業に取り組んでこられた。そこで農作業する姿を見て、お年寄りを主に、いろいろな人たちが出入りしては農作業をしていく。別に割り当てや分担があつて農作業をするわけではなく、勝手に状況を見て自分ができることをやっていく。その合間にお茶を飲みながら

林さんが話をする。決してかしまった雰囲気ではなく、まさにお茶飲み話そのものである。ところがその話は捨てる置けることができない力と魅力を秘めており、ぐいぐいと体に入ってくる。ところが林さんは「政治家とマスコミは大嫌い」で、絶対に新聞やテレビをはじめとするマスコミの取材に応じることはなく、自分の名前や顔が世間に知られるようになるようなことはすべて断り、徹底して拒んでおられた。このためどこにもその言葉は残ってはおらず、このまま忘れられてしまいかねない。それはそれであまりにもつたない話ではないかと真底思っていた。

こうしたことからもう7、8年も前になろうか、本当に恐る恐る林さんをお願いしてご了解をいただき、話を聞く際にはあくまで個人的にということでペンを走らせ、メモを書き溜めてきた。ところが書き溜めるほどに、これを独り占めしているのはかえって申し訳ないような気持ちにかられるようになり、これを若干整理して、やはり林さんのお許しを得たうえで、「H氏」という匿名にし、その中心となる言葉を拙著『農的社會をひらく』（創森社）で紹介させていただいたこともある。その後も3、4年にわたってメモは追加されてきた。

そうした経過も踏まえて、残されたご家族にあらためてお願いをして、今回、NPO 介山大菩薩会設立20周年に合わせ、「林金次語録」として実名を出すとともに、自費出版という形で、洗心道場に関係される方々に配布することをお許しいただいたものである。

ここで林さんなり洗心道場に、私がどうしてかかわりを持つようになったのかについて触れさ

せていただきたい。私は妻の政子ともども、今年で16年目となるが、山梨市牧丘町に民家を借りて、これを「みんなの家・農土香（のどか）」とし、隔月で東京の小学生を中心に二泊二日での「子どものいなか体験教室」を開いてきた。子どもが20人前後から多い時には30人程、これにボランティアの親を含めると大人5人から10人弱が加わる。

いなか体験教室の柱は農作業といなかの暮らしの体験、すなわち子どもたちが畑から自分たちが穫ってきた野菜等を薪を燃やしたりしながら調理をし、自ら配膳・片付け、そして掃除を行い、夕食後はそれぞれが主役になってコンサートを聞く等の、“手づくりの暮らし”を体験してもらってきた。その第一の柱の農作業体験には田植えと稲刈りが欠かせないが、この“場”を提供いただいていたのが林さんであり介山大菩薩会である。

ここでも田植えや稲刈りは田植え機やコンバインを使って作業してはいるが、我々だけでなくこうした作業を体験したいというグループや個人もあることから、手作業で田植えや稲刈りができるよう、自分たちの作業とは別枠で、田んぼの一部を手作業用にとっておいていただいていた。いなか体験教室を始めた頃は、行政が主催する田植え等に参画させてもらう形をとったりもしたが、自由裁量の余地が乏しく、なかなかこちらの考えるプログラムとの調整が難しく困っていた。そのようなときに、いなか体験教室でなにかと支援していただいている牧丘町の大島八郎さんが、林さんならきつと対応してくれるのではないか、ということでご紹介いただいたのが馴れ初めである。

お願いの都度、「自分は使われるだけ」「葛谷さんがやりたいなら対応する」と淡々と受け入れ、「こうして人が来てくれるのが自分の財産だ」と言ってくれました。そして子どもたちが農作業を始める前には必ず「これは遊びではなくて仕事だ。仕事をしない子どもは帰ってほしい」「ここで皆が植えた苗を自然が、太陽が育ててお米を実らせてくれる」ことを強調された。

田植えのお願い・打合せと、稲刈りのお願い・打合せ、そして年末等の挨拶も含めると、2、3カ月に1回程度ではあるが、10年以上洗心道場に足を運んできた。林さんと私たち夫婦だけの時もあれば、農作業にきた人たちと一緒する時もあったが、お茶をすすりながら、林さんが語る話に耳を傾ける。これを楽しみに出かけてきたというのが本当のところかもしれない。

ところで2018年の12月28日に、年末の挨拶に洗心道場におじゃました。実はこの時、家内は子宮がんで年明け手術をすることになっていた。家内は当然のことながら大きな不安にとらわれており、こうしたことを林さんに率直に打ち明けたところ、林さんがいつにも増して熱く語ってください、帰りがけには「心」のバッチを家内が着ていた服に付けてくださった。家内は病院でいつも「心」のバッチをつけ、また私が書き留めておいた「H氏メモ」を繰り返し繰り返し読んで生きる力をいただき、おかげさまでずいぶんと回復もした。

この時の「H氏メモ」をあらためて整理し直し読みやすくしたものが本書となる。林さんからほよいなことをしてくれた、と言われるかもしれないが、林さんの言葉が持つ力をもっと多く

の人たちに届け共有していきたい、その一心でとりまとめ、発行させていただくものである。

その林さんの言葉の根幹にあるものは、「太陽と土と水」があつてこそ人間は生かされていること、そして本当の幸せはモノではなくココロにあること、こうしたことが基本であり、基本を尊ぶべきことを実に端的に教えている。そしてこれらは現代人が、文明・近代化、管理社会が徹底される中であらかた忘れ去ってしまったものでもある。まさにこうした時代だからこそ林さんの言葉そして生き方に学ぶていくことが必要なのではないか。

林さんは自らのことを「死んで50年たつてわかるようになる。生きているうちは変わり者で終わる」と語っていたが、それもその言葉や足跡が残されてこそ、である。50年たつて少しは林さんの理解者が増え、「基本を尊ぶ」社会に近づいていることを念願する次第である。

2020年5月3日

聴き取り・整理 葛谷 栄一

## 目次

本書の発行にあたって

3

林金次さんの人生、来し方

10

〈出生〜人生前半〉〈雲峰荘を始める〉〈介山記念館と洗心道場を立ち上げる〉

林さんにあらためてお聞きしたこと

22

〈林さんに影響を与えた人は？〉〈先生、師は誰か？〉〈日常の暮らしぶり〉

〈父親としての林さん、そしてお金〉

林金次語録

32

〈悩み、苦しみ〉〈幸せ〉〈心〉〈恩返し〉〈覚悟〉

〈自己認識〉〈齢〉〈命〉〈自然〉〈人間〉〈神様〉

〈生き方〉〈子ども・親〉〈人それぞれ〉〈世間〉

〈生活・自給〉〈持続〉〈教育〉〈もうけ〉〈財産・金・宝〉

〈経営〉〈農業〉〈補助金〉〈政治〉〈政治家・マスコミ〉

〈国〉〈科学技術〉〈原発〉〈その他〉

## 林金次さんの人生、来し方

林さんの言葉の持つ意味なり重みを理解するためには、林さんの生きざまについてある程度は知っておくことが前提となる。そこで林さんの若干の生い立ちめいたものと、洗心道場を立ち上げた経過や活動等について、林さんからお聞きした話を中心に紹介しておくことにする。

### 〈出生〜人生前半〉

林さんは昭和5（1930）年2月28日に山梨県東山梨郡上小田原（現在は甲州市塩山上小田原）で生まれ、6人姉弟の3番目で長男であった。父・山本久十郎（ひさじゅうろう）は香川県の瀬戸内海で、小豆島のすぐ西側に浮かぶ島・豊島（てしま）の出身で、塩山で活躍していたおじ（山本石材、トロッコ用の敷石の切り出し・販売）を頼って当地に来たもので、当地出身の母・林美津江と結ばれ、林姓を名乗ることになったものである。

戦前に生まれ、戦中・戦後を生き抜いてきたが、太平洋戦争が終わったのは15歳の時ということになる。この年に自分の家に初めて電気がついたそうだが、それまではランプの煤掃除はいつも林さんの仕事で、父親は体が弱かっただけに、これに限らず母親を助けている手伝うことは多かったわけだが、これがその後の人生にとっていい経験になったという。

18歳の時、父親と死別。病弱な父に代わって家計は主に母親が切り回していたらしい。このため小さい時から母親にいろいろな指示されたり教えられることが多く、特に母親に恩義を感じていたようでもある。母親の影響が強かっただけでなく、また性格も母親に似たらしい。こうしたこともあってか、林さんはいつも仏壇で「父母恩重経（ふもおんじゅうきょう）」\*を唱え、また中里介石の「母をしのぶ言葉」\*\*を大事にしておられた。

10代で炭焼きを始めたが、その後、母親から「お前には苦勞をかけたから、後は好きなことをしろ」と言われ、材木・建材、製材、チップ、石屋等と様々な職種を経験し、一時、東京・秋葉原で仕事をすることもあったという。概ね10年ごとに職種が変わってきたようで、駆け出し時を除けばいずれも起業したものであり、雇用された経験はほとんどないようだ。

この間、7回“倒産し、再建も経験したが、「仕事に不自由したことがない」「奴隷になって体を売るようなことはしなかった」という。また3600万円の転業資金が必要となり、3000万円借金をしたことがあったそうだ。この時、「自分をじっと見ていて心配してくれた人がいて、その人に頼んだわけでもないのに担保を提供してくれて借金をすることができた。心配し、助けてくれた人は自分の宝物」と語る。

私生活の面では、結婚したのが昭和36（1961）年8月、31歳の時である。見合い結婚で、奥様の恭子さんは東京市浅草区（当時）の生まれで、年は8つ違い。一女二男を授かった。その後、お孫さん3人にも恵まれることになる。

〈雲峰荘を始める〉

起業と倒産、再建を繰り返し波瀾万丈の人生を歩んできたが、49歳の時、昭和54（1979）年7月5日に雲峰荘を開業することになる。

林さんはチップ工場を経営していたが、オイルショックにともなう不況が原因で倒産。この時、途方に暮れた林さんが相談に訪れたのが、雲峰寺の中村雄禅和尚であった。和尚から「今、大菩薩がにぎわっているのは中里介山が小説を書いたおかげだ。あなたも人が集まるようなことに努めなさい」という話とともに、「ここには悪い人はこない」「今ある温泉をもっと多くの人たちに利用してもらおうことが大切だ」と言われたのが、雲峰荘をひらくきっかけとなったものである。今、雲峰荘のある土地にはもともと自宅があり、ここは雲峰寺の境内の一部で、雲峰寺の所有になるものであった。その自宅で営業としてはないが、頼まれば登山客を泊めることもあり、温泉にも入つてもらっていた。雄禅和尚のアドバイスによってチップ工場経営から温泉旅館の経営へと転換をはかることになったのである。

その雲峰荘を立ち上げるにあたっては、当然のことながら多額の資金が必要となったが、以前からここに泊まっては温泉を楽しんでいた人たちを中心とした応援があり、これで必要な資金が調達可能になったようだ。

林さんが導かれて経営することになった雲峰荘は、知る人ぞ知る格別の温泉宿で、秘境の湯として、また泉質の良さでよく知られる。甲州市塩山上萩原に位置するが、JR塩山駅から国道411号線、青梅街道として知られる道を北に車で20分ほど上った大菩薩峠の登り口の少し上に位置する。その名からわかるように、この道は柳沢峠から奥多摩をとおって東京の青梅に抜ける。塩山からは重川に沿ってかなりの急こう配が続く、桃畑が続く中に棚田が点在する。この筋からは富士山は見えないものの、甲府盆地の向こうに南アルプスの山々が連なり、特に桃の花が開く時期の眺望は素晴らしく、オートバイに乗ってツアーを楽しむ連中もかなり多い。

以前からよくここに出入りしていた一人に相川嘉正・東邦大学医学部教授(当時)がおられたが、その相川教授は雲峰荘を「地理的にも大菩薩峠の分岐点にあり、登山者の疲労回復、柳沢峠を経て奥多摩湖への観光ルートの出発地点でもあり、心身の保養、静養に最適地である。それにも増して、昔から温泉と信仰は強い結びつきにある。裂石温泉雲峰荘と雲峰寺とはまさにそれにあたる」と紹介している。そして温泉水については、「主たる成分はNaHCO<sub>3</sub>（炭酸水素ナトリウムまたは重炭酸ナトリウム）である。泉質はアルカリ性単純温泉と云える。強いて云えば純重曹泉の類に属する」としている。pHは9・9で「裂石温泉の10近いpHの水は、東北地方や中部地方などにもまれにみられる」としており、「入浴では創傷及び火傷、皮膚掻痒症、リウマチ性疾患に効用」があるとともに、「飲用では痛風、肥満症、糖尿病、慢性消化器疾患、慢性肝疾患、胆道疾患に適応」と分析されている。この水は「飲める温泉・天然アルカリイオン泉 雲峰の霊泉」として販売されており、我が家でもこれを大切にいただいているが、飲むほどに体が浄化されるようなとても気持ちのいい水である。



〈介山記念館と洗心道場を立ち上げる〉

50歳に近い区切りで雲峰荘を始めたわけであるが、それからさらに20年が経過して平成10（1998）年春に、介山記念館が開設されている。

介山記念館は小説『大菩薩峠』で知られる中里介山を記念するものであるが、中里介山について手短かに紹介しておけば、明治18（1885）年に現在の東京都羽村市に生まれ、昭和19（1944）年、59歳で亡くなるまで小説家として活躍した。

『大菩薩峠』は、1913年から東京の都新聞（当時）などに連載したもので、幕末を舞台に主人公の盲目の剣士・机龍之介が活躍する、未完の超長編の大衆小説・剣豪小説である。映画化、舞台化もされ、芥川龍之介に「百年後に残っているのは、純文学作家ではなく、中里介山ではないか」と言わしめるほどの一大ベストセラーとなったものである。「中里介山はキリスト教や社会主義にも強い関心を持ち、トルストイの影響を受けるとともに、内村鑑三が主催する柏木教会に通った」こともあるらしい。「晩年まで簡素でストイックな生活を貫いた。『大菩薩峠』がベストセラーになって得た印税は事業につき込み、本人は菜食を中心とする粗食で、住まいは六畳一間しかなかった」ようだ（『Wikipedia』等より）。

その介山は小学校を出てから電話交換手や代用教員をしながら家族を支え、また独力で勉強を重ねて正教員資格も取得している。28歳の時に『大菩薩峠』の連載を開始する一方で、39歳の時に児童のための教育機関「隣人学園」を作り、45歳の時には塾教育と直耕（自ら「直接」大地を

耕し、自然から「直接」生きる糧を得る、生き方）を合一させた「西隣村塾」を出身地の羽村に開校している。ただし、実質は半年で挫折を余儀なくされたようではある。

林さんは、介山と同様に苦勞の多い青春時代をすごすとともに、結果的に介山の生き方を追いかけてきたようにも見える。そもそも雲峰荘を立ち上げるにあたって、雲峰寺の雄輝和尚から、大菩薩に人が来るのは介山のおかげ、介山のようにこの地に人を集める仕事をするよう諭されたのが介山とのそもその機縁であった。そしてその後、雲峰荘の順調な経営を実現した林さんは「何らかの形で、介山に恩返しをしたいと思っていた」とも語っておられる。

その中里介山と林さんとの縁を結び付ける直接的な役割を果たしたのが元読売新聞記者の柞木田龍善（たらきだ・りゅうぜん）氏である。雲峰荘を立ち上げて10年ちよつと経過した1990年頃のこと、中里介山の愛弟子でもある柞木田氏は、「遺髪と遺品を小説『大菩薩峠』ゆかりの地に残して欲しいとの介山居士の遺言に依り、それを実現するために、遺髪を納めた壺と遺品をリックに背負い（大菩薩嶺に）登って来た」ところが手持ちの案内ではよくわからず、「夕暮間近に迫って来てとまどう中で、折よく雲峰荘を見つけ林氏と出会った」ものである。そして一面識もない林さんに相談を持ち掛けたのが事の始まりとなった。

ちなみに中里介山が亡くなったのは昭和19（1944）年4月であり、それから45年ほど経過してから柞木田氏は大菩薩嶺に足を運んだことになるが、この間のいきさつについては知る由もない。その柞木田氏は大正3（1914）年、青森県八戸市に生まれ、15歳の時に八戸市浄土宗

成田龍観師の弟子となり、20歳の時には中里介山が主宰する「西隣村塾」の塾生となっている。戦争で召集されて満洲にわたり、敗戦でシベリアに抑留された経験をも持つ。柞木田氏は平成10（1998）年3月21日、まさに介山記念館の完成を見届けたかのようにして84歳で亡くなっておられる。

「林氏も突然の話しで面喰ったが、其の熱意にほだされ、何とか実現できる様にと考え、私財を投げ打って協力を惜しまなかった。此れを伝え聞いて、地域の人々は云うに及ばず、遠くは四国の人を始め、東京、大阪、奈良と多くの心ある人々が進んで浄財を寄付して、事業」はすすめられた。

ここで「四国の人」とあるのが、香川県の豊島にある十輪寺（じゅうりんじ）の住職・清水法淳師である。林さんのお父さんは豊島の出身であるが、林さんはこの法淳師といつ頃からかは定かでないが親交が始まり意気投合していたらしい。法淳師が林さんから介山記念館設立の話聞いて、介山記念館を造れと言って1000万円をくれたそうで、その後さらに500万円を送ってきたとのこと。これが大きな後押しとなり、県内外の約800人からの寄付金と林さんの借金により4000万円が賄われ、介山記念館は実現されることになる。

敷地は青梅街道をはさんで雲峰荘の反対側、同じ甲州市塩山上萩原にある、倒産したチップ工場の跡地に造られた。平成8（1996）年9月に着工し、建物は山梨県の峡北地区の旧家の土蔵をもらい受けて移築したもの。あわせて介山大菩薩堂、介山礼拝所も設けられた。

開館は平成10（1998）年の春、4月となった。柞木田氏の逝去にともない開館のセレモニーは執り行わなかったようだ。柞木田氏が集めた膨大な資料を譲り受け、その中から介山の肉筆になる原稿や映画『大菩薩峠』のポスターをはじめとする資料が展示されている。そのうえで開館を実現した翌年の平成11（1999）年8月に、林さんが発起人代表となって、特定非営利活動法人・介山大菩薩会を立ち上げており、11月に山梨県の認可を得ている。

これは「中里介山の遺品、その他中里介山に関係のある書跡、工芸品、絵画、遺品等を永久保存し、中里介山の事績を検証して、中里介山の遺業の普及啓発を行うことを目的」としたもので、理事長には父・龍善氏の遺志を継いで柞木田明寿氏が就任し、林さんは副理事長に就いておられる。この介山大菩薩会が「中里介山の遺業の普及啓発」をしていくための具体的な実践・活動の場として設けたのが洗心道場なのである。

洗心道場は介山記念館から数キロ下った、甲州市塩山上小田原にある林さんが管理する田んぼに古材を利用して建てられ、平成12（2000）年に活動を開始している。「介山居士の文化的遺産や、作品を通して偉大な先人の足跡を学び、物質文明に埋没した人間としての心の復活を掲げ、多くの人々の力により、世に広め、後世に守り伝えていく」ことをねらいに、多くの人たちが日常的にかかわり、田植えや稲刈りを中心にしての農業祭等の活動も展開している。

林さんにとって概ね50歳からは雲峰荘が主戦場であったものが、60歳台は介山記念館の建設に打ち込み、概ね70歳からはこの洗心道場がホームグラウンドとなった。



農家育ちではなかったが農村に育ち、多少は農作業を体験したことはあったのであろうが、林さんは「百姓を始めたのは70歳から」と言う。朝早くから夕方まで野良で農作業に取り組んでいたが、これを見ていろいろな人たちが農作業と一緒にするようになってきた。この青梅街道わきの重川の急な谷合に棚田や畑が散在するこの地域も、ご多分にもれず担い手は不足して高齢化がすすむが、耕作放棄したくない、できれば作業を委託したいという生産者もいることから、周辺の田んぼ等を引き受けることになって徐々に耕作面積が広がってきた。

農作業は多くの人が関わって分担をしているが、特に指示や割り振りがあるわけではない。それぞれが自発的自主的に農作業をしていくだけであるが、一番、洗心道場にいる時間が長いのは林さんで、最後に手が着けられずに残ったところは林さんがカバーしていたのではないか。

ここを6月第一日曜日に田植え、10月の第一日曜日を目安にして稲刈りの体験の場として、介山大菩薩会の主催で希望する子どもや大人、身障者も含めた市民を対象に、開放している。地元甲州市にとどまらず東京や横浜等の首都圏からも参加者があり、100〜150名ぐらいが、いくつかの田んぼに分かれて田植えや稲刈りをするが、普段は静かな谷合もこの時ばかりは大勢の子供たちでにぎわい、様々な声が飛び交う。

この時の楽しみが、介山大菩薩会のメンバーが腕によりをかけて作ってくれる昼食である。ここで生産された黒米を含めたお米を炊いてのおにぎりや餅、ほうとう、地鶏を使ってもつ煮等がふるまわれる。林さんはいつもこうした中で温かな目で見守ってくれていた。まことに感謝の

言葉あるのみである。

このように林さんの人生を追憶してみても、あらためて感じさせられるのが林さんと中里介山との不思議な縁である。その種をまいたのが雲峰寺の住職であった雄禅和尚であり、結び付けたのが介山の愛弟子であった柞木田龍善氏であった。

介山が究極的に目指したのは、西隣村塾に象徴される、「農業を主体とする自給自足の塾教育」だったように思う。介山は「新しき村」運動の中心であった作家・武者小路実篤と奇しくも同年生まれである。武者小路が宮崎県児湯郡に開村したのが1918年。一方、介山は30年に西隣村塾を開いている。介山が「新しき村」を意識しなかったはずはないが、これとはあえて別の道を歩んできたわけで、庶民的なところに足場を置くとともに、「塾教育」、特に子どもを重視するところに理由があったのではないか。

柞木田氏は林さんといっしょになって、この西隣村塾を現代に蘇らせようとして介山記念館、洗心道場を構想したような気がしてならない。西隣村塾への介山の思いを林さんの理解で表現したものが洗心道場であり、林金次語録の一面ともなるのである。林さんの、そして洗心道場に つながる介山の思いの核心をも、語録からしっかりとくみ取っていききたいものだ。

\*父母恩重經

父に慈恩（じおん）あり 母に悲恩（ひおん）あり そのゆゑは  
人の此の世に生まるゝは 宿業（しゆくごう）を因として父母を縁とせり  
父にあらざれば生ぜず 母にあらざれば育てられず

ここを以つて氣を父の胤（たね）に稟（う）けて形を母の胎に托す  
この因縁を以ての故に 悲母（ひも）の子を念（おも）うこと  
世間に比（たと）ひあることなく その恩（おん）未形（みぎよう）に及べり

- (一) に懐胎守護（かいたいしゅご）の恩
- (二) に臨生受苦（りんしょうじゅく）の恩
- (三) に生子忘憂（しょうじぼうゆう）の恩
- (四) に乳哺養育（にゅうほよういく）の恩
- (五) に廻乾就湿（かいかんじゅしつ）の恩
- (六) に洗濯不淨（せんかんふじよう）の恩
- (七) に嘔苦吐甘（えんくとかん）の恩
- (八) に為造悪業（いぞうあくごう）の恩
- (九) に遠行憶念（おんぎようおくねん）の恩
- (十) に究竟憐愍（くきようれんみん）の恩

父母の恩 重きこと 天の極まり無きが如し

\*母をしのぶ言葉

母の生涯の希望は、わが輩を英雄豪傑に仕立てることもなく、偉人文豪にこしらへ上げるこ  
とでもなく、早く適当な嫁を持たせて孫の顔を見たいことであった。

そうしてこの家の跡を絶やさずして、先祖への報いにしたことだけであった。母の信條と希  
望は絶対に正しい。その正しさに従えなかった悪まれっ子の運命は人間業ではどうすることも出  
来なかった。

たらちね母の恵みの温かき 泉涌くなる中房の郷 介山

## 林さんにあらためてお聞きしたこと

林さんが話し始めれば私はもっぱら聞き役に徹することにしていたが、どうしても確認しておきたい、聞いておきたいと思ひ質問をさせていただいたこともあった。その中で林さんの考え方や人柄をよく示していると考えられる、忘れがたいいくつかをここに取り上げておきたい。

〈林さんに影響を与えた人は？〉

林さんと話をしていると禅僧と話をしているような気がしてくる。そんなこともあって「林さんに大きく影響を与えた人は誰か」と尋ねてみたことがある。その時にあげられたのが「ユウゼン和尚」、すなわち雲峰寺の第11代の住職である中村雄禅和尚で、ずいぶん鍛えられたらしい。本書の中でも幾人かの僧侶の名前が登場するように、それぞれに影響を受けたのであろうが、雲峰寺の住職との親交は特に深く、雲峰荘の立ち上げを促し、中里介石を意識するきっかけを与え、介石記念館と洗心道場の開設を導いたともいえる。身近なことをつうじて教えられることが多かっただけでなく、節目節目の大事などところで相談を仰ぎ、力をいただいていたようだ。

雄禅和尚は明治30（1897）年2月に東山梨郡神金村上萩原（現在、甲州市塩山上萩原）に生まれ、滋賀県の永源寺で5年、京都の妙心寺で2年修行して大正15（1926）年12月に雲峰寺の住職に就いており、昭和58（1983）年1月1日に85歳で亡くなるまで、丸56年にわたってこの住職を務めたことになる。

その雲峰寺であるが、天平17（745）年に、「行基が大菩薩の山中で修行中、突如大石が二つに割れて、その中から一夜で生え出た萩の木を用いて、十一面観音像を刻み、この地を萩原と命名し、草庵を建てて観音像を安置した」のが裂石山雲峰寺のはじまりとされる。

雄禅和尚は「雲峰寺草創の行基菩薩の信仰を受け継ぎ、大菩薩嶺に妙見大菩薩を祈り、……生涯登嶺祈願を実践し、広く教化に務め」とともに、「生涯仏道一筋に生き、武田ゆかりの寺宝を守り、荒廃した寺の再興を計り、聖地の山林保護に力を尽くした」ともされる。ちなみに介石記念館には雄禅和尚の石像と並んで、「物貧しくとも、心清らかな人は長く栄え、私利私欲の人一時の栄華も夢の如く残す」という「和尚語録」の一つが刻まれた石碑が建っている。

雲峰荘を立ち上げる際、その土地を譲ってくれたのも雄禅和尚であったが、雲峰寺の境内にあった土地の一部を雲峰荘の土地として譲るにあつたの土地測量では、雄禅和尚は立ち合うことなく、測量士が測るに任せたという。二人はよほどの信頼関係で結び付けられていたことを象徴する話でもある。

〈先生、師は誰か？〉

先の話とはまた別の機会に質問の仕方を変えて「林さんに先生、師はいるか」と聞いてみたことがある。その際の答えは、石和の施設にいる小児まひの子ども、A君だという。林さんは毎年、

その施設に雲峰荘からの湧水「雲峰の霊泉」を届けに出かけておられた。目の見えない子をはじめとしていろいろの障害を抱えた児がたくさんいる中で、A君は自分の障害はまだまだましな方で、これまで自分はたくさんの人たちに世話になつて生きてきたと言い、A君はそうした障害を持つ他の子どものために手伝つたり助けたりすることができたときに、心からの喜び、幸せを感じる、という話を林さんにしたそうだ。そのA君の話はぜひと林さんの心に沁みただのであろう。林さんは、この子、A君こそが自分の先生、師だ、と語る。

この話を聞いて、なるほどそうか、と思つたのであるが、林さんは何匹もの犬を飼っていたが、その犬たちは足が悪かったり目が見えなかつたりと障害を持つた犬ばかりである。林さんは人間は勿論、犬にまで、障害を持つたり弱い立場にいるものに心を寄せる人なのだ。いやそれ以上に、そういう困難の中を生きている人だからこそ人生にとつて肝心要なところを把握しており、そうした人から教えられることは多い、というように考える人であることにあらためて気づかされたのである。

#### 〈日常の暮らしぶり〉

林さんの日常の暮らしぶりはごくシンプルで慎ましいものであつたようだ。自分で作つたお米や野菜を中心とした食事で、卵をかけて食べるのが一番の贅沢だと語る。洗心道場に顔を出すといつも囲炉裏でお茶を入れてくれるが、ここに来る人たちが持つてきたのであろうせんべいや

チョコレート等のお菓子も出してくれる。林さんはこれらのお菓子を、こだわりなく食べる。あるものを少しいただく、という生活ぶりであると見た。

朝は空が白み始めると起きて、まずは洗心道場に車を走らせて農作業。収穫した野菜等を持つて雲峰荘に帰り朝食。しばらく休憩してまた洗心道場で農作業。人が来れば、その合間合間にお茶を飲んで話をし、人が帰ればまた農作業。昼になれば雲峰荘に戻つて昼食、そしてちよつと昼寝。それからまた洗心道場で夕方まで農作業。夜は夕食の後、雲峰荘に来た客と話をする。林さんと話をするのが楽しみで来る客も多かったようだ。それから温泉につかつて就寝。林さんの晩年は、洗心道場での農作業中心の毎日であつた。

#### 〈父親としての林さん、そしてお金〉

これは林さんへの質問ではないが、残されたご家族との話の中でお聞きした二つのことを記しておきたい。

一つは林さんは怒つたことがない、らしい。小学校6年の時に先生から怒つてはダメと諭されたことがあつて、これが林さんの身についたことのようなのだ。奥様が語るには、林さんが仕事を終えて帰宅すると子どもたちが林さんの背中や肩に上つたりとまとわりついて大変。奥様が子どもたちをしかつたり、また林さんに子どもたちを怒れと言つても、林さんはここにこしなから喜んで子どもたちがするに任せていたという。

■林さんにあらためてお聞きしたこと



もう一つが林さんのお金にまつわる話である。倒産した時、転業した時、雲峰荘を立ち上げる時、介山記念館を造る時、お金はまったくなくなしで一体どうするんだろうと思っていると、不思議にも誰かが現れてお金を工面してくれたという。林さんだからということではあるが、どうも他人のためにお金を使おうとしていると、天がお金を回してくれるらしい。

またお金が工面できたとはいっても、借金の返済がのしかかってきた時もあったが、これも「子どもたちが借金を奪い合ってきた」と林さんがよく語っていたように、親の後姿を見て育ってきたご子息たちが親を支えてきたわけで、これも林さんであってこそこの話だ。

そして毎年、特に親しくしている何人かと懇親の場を設けていたようであるが、こうした場では絶対に他人には払わせなかったという。金はある世には持つて行けない、を、まさに身をもって実践しておられたということでもあろう。





右から林さん、柞木田龍善氏、清水法淳師



奥様・恭子さんと雲峰荘玄関でのツーショット



介山大菩薩会設立総会で挨拶する林さん



介山記念館手前にある雄輝和尚の石像





介山農業田植祭での集合写真（2019年）



洗心道場で仲間たちと



介山農業田植祭での田植風景



洗心道場で子どもたちと

《語録》

〈悩み、苦しみ〉

悩んでみても、何とかなるなら悩むのもいいが、悩んでなんとかなるわけではない。悩んでもしょうがない。お任せするだけ。

学問するから、勉強するから悩みを持つことになる。

人間は欲のかたまり。欲がないと死んでしまう。

ではあるが、いらんいらん、と言えばすべてがうまくいく。

生きることは苦しみの連続だ。その苦しみをどう考えるのが問題だ。

〈幸せ〉

貧しさの中に幸せがある。豊かさの中に幸せがあると思込んでいる。

欲をかいても幸せにはならない。

幸せとは感じ方。ありがとう、という思いを持っていけば、どうにでもなる。

一番の不幸は悪い人に出会うこと。

〈心〉

手も足も体も、そして脳も使うのは心。

すべては心が決める。手も目も脳も皆、心の道具だ

心がなければ何も生かされない。

心に感謝しなければならない。

目でなく、心の目で見る。

人の心は見えない。見えない世界が一番こわい。

日本の美しい文化は心にある。その心がアメリカの自由に奪い取られてしまった。

心の持ち方が大事。心の持ち方が適切かどうかは、自分ではなく、他人が決めること。

子どもは欲がないからいい。

物と心は反比例する。物があると心が崩れる。

心は良くもなれば悪くもなる。

#### 〈恩返し〉

生きている間に、すべてを返す。

全部返せば、ありがとうと言われるだけ。返さなければ悩みを抱えることになる。

#### 〈覚悟〉

死んで50年たってわかるようになる。生きているうちは変わり者で終わる。

生きているうちにしか価値は作れない。

#### 〈自己認識〉

自分が悪いと認めれば問題は解決する。認めれば許されて、生きていくことができる。

悪いと認めないからウソにウソを重ねてどうにもならなくなる。

〈齡〉

年はとったほうがいい。年をとったからできること、言えることがある。

物は買えても年は買えない。

百になっても役に立てる。

年は一つずつしかとれない。

〈命〉

命も借り物、返すもの。

自分のものではない。どうにもならない。

命だって自分のものではない。他人のことをやっていればいい。

〈自然〉

365日、お天道さまに使ってもらおう。

自分が作るのではなく、自分は稲にイモに使ってもらっている。

お天道さまは絶対にウソはつかない。

稲も里芋もウソは決して言わない。

人間は自然界から相手にされなくなった。

自然の大事さ、ありがたさを人間は忘れてしまった。自分のものは何も無い。鹿や動物は滅びない。人間は逆らうから滅んでくる。

動物はともに生きる、協同してやる。利口な人間ほど馬鹿になって苦しんでいる。人間ではなく、おれは畜生。人間だと他人と違っていると考えることになる。

自然のものは種をまかなくても自然にでてくる。

自然界は人間には作れない。

#### 〈人間〉

もっと、もっとで人間は苦しんでいる。

いらん、いらんが人を幸せにする。

昔からお天道さまが見ている。人間は無駄なことばかりやっている。

馬鹿のほうが幸せ。

人間はありがとうを忘れてしまった。

欲がなくなれば、人に頼むとやってももらえるようになる。

金のある人にいい人はいない。

いい人になると悪い人には出会わない。

人間の欲望、煩惱。動物にはない。神様が人間だけに与えた。

欲しい、という苦しみ。人間は豊かになって苦しんでいる。

何もない、明日もないのが人間。

利口な人は自分でやる。馬鹿は人が助けてくれる。

人間は反対のことばかりを思う。欲、金……。

人間は自分のことで苦しんでいる。

欲があるから苦しむ。

今の人は人を許すという勇気がない。

〈神様〉

神様は目に見えない。知らない人たちが自分のことを心配し助けてくれる。

神様はそこにおられる。

いい人と出会わせてくれるのが神さん。

お天道様が一番の神様。錢をくれともいわないで、草、稲、……すべてを作っている。

人間が神さんをこしらえる。一番偉いのは人間ということになる。

神さんはいっぱいいる。神さんは間違った。誤りばかりだ。

ものはすべて反対。悪口を言う人は神さんだと思え。

坊さんは人をだましてもらうだけ。他人のことはやらない。



〈生き方〉

基本を尊ぶ。

お天道さんが出てくれば起きる。

今日あるものは今日使う。

あらゆるものに助けられて生きている。口、お尻、腸……。ありがたい。

自分で考えたことはダメ。苦しむだけ。世の中に使われて生きる。

他人が見るほうが正しい

他人の目が正しい。

すべては借りもの、預かりもの。(子どもも)

すべては借りもの。返すだけ。

世の中で大事なことは勤勉さ、まじめさ。

必要なことは他人が教えてくれる。苦勞してみではじめて分かる。

世間、従業員、子供が助けてくれる。

会社、親、他人に奉公する。

来たいという人に使われている。

他人に助けられて生きている。他人が来て木(薪)も金も置いていってくれる。

分け合う、分かち合い。

助けられて生きている。

他人のためにやって喜ばれること、相手を思う心が大事。

世の中に使われるだけ。学問が失敗させる。

自分もやっかいもの。自分を直さないと。

自分のことをやれば自分がつぶれる。

自分のことは自分でやらなければ。他人はあてにしない。

他人のことをしていると残る。

自分のものは残らない。他人のものは残る。

商売はしていないから、人がいっぱい来る。来てくれとも言わない。

自分は来る人のお手伝いをしているだけ。客が来て自分のことを心配してくれる。

有名にならないからいい。(有名になったらやれることもやれない)

必要なものはいっぱい転がっている。拾い物で十分。

嫌なやつは相手にしない。来る人はその人が決めてくるから間違いない。

水、空気、土が人間を生かしてくれる。自分で何とかしようとする人間が一番馬鹿。

わからないこと、明日のことは心配しない。今日のことだけ心配すればいい。

何かあれば他人が見てくれる。

お金のある人のところに人は来ない。金持ちが「林さんはいいな」とうらやむ。

貧乏だから見えるものがある。下にいないと拾えないものもある。上にいるとばちが当たる。

持っている人ほど寂しい。

人間の価値は他人が決める。

使われて生きる。畑も使ってくれる。

子どもに、ナスに、桃の木に使ってもらおう。ナスは自分で水を汲みにいくことはできない。

人にやつてもらったことが財産。

毎日がお返し。お返しをしてあの世に行く。

一番自分が悪い。

悪いことは自業自得。

他人のことは見えても、自分は見えない。

「あおげさまで」が出てこない人間は幸せにならない。

満たされた人はいない。

自分ありがたいことばかり。

無欲は大欲。他人のことをやっているから。

欲しいと思っている間は満たされない。

貯めたものは借り物。

努力はしない。一番になって何が変わるのか。人のためになることをやるだけ。

偉くなる必要はない。行き着く先はみな同じだ。

〈子ども・親〉

子どもは自分のものではない。他人のことをやるように仕向けるだけ。皆、授かりものだ。親が悪い。親は直しようがない。

子どもがどうなるかは他人が決める。

言っではいけない。子どもがやるように仕向ける。

子どもが親から学ぶことがなくなってしまった。

昔は「掃除しろ」「片付けろ」。今は「勉強しろ」「塾へ行け」と金をかけることばかり。

〈人それぞれ〉

子どもにやれ、という必要はない。他人にはそれぞれ役割があり、みんな違う。

やりたい人がやればいい。

バカがいないと困る。利口ばかりではやっていけない。

人は考え方も格好もみんな違う。それを同じようにしようとしている。馬鹿も必要だ。

ダメな人間が役に立っている。

皆、人間は宝物を与えられている。

一番下にいれば拾い物で食っていける。

皆同じではつまらない。違うからおもしろい。

世界に同じ人はいない。だからおもしろい。

利口な人には分からない。馬鹿だからわかる。

馬鹿が楽しい。みんなが助けてくれる。

〈世間〉

他人を直すには自分が変わる（自分を直す）しかない。

世の中なんか仲良くなんてできない。

世間はだましっこ。いつ気が付くかが勝負。

相手にされないことに価値がある。みな組織につぶされる。

今、本当のことは誰も言わない。

偉くなった人ほど落ちる落差は大きい。

欲しい欲しいというのが一般の人。そういう人もいないと発展しない。

自分のようなものは上には立てない。区長をやっただけ。

人間はあっちこち見てばかり。

来てくれというから長続きしない。イベント、観光協会、行政、全部来てくればかり。

〈生活・自給〉

三食食べるがぜいたくはしない。卵1個だけいただく。

桃の木でも建材でも何でも切って持ってきてくれる。エネルギー代はかからない。日本は皆、外国から買ってくる。

石油は一滴も使っていない。雲峰荘も炭を焼いて床暖房をしている。ボイラーも使っていない。炭を利用した水の滅菌装置があるだけ。

昔の人は自分で考えて工夫しながら自給。薪、炭……。貧しくないとできない。あまりものが多すぎる。あまった木を燃やし、あまったものを食べるだけで十分。

〈持続〉

来たい人が来るようにしておけば滅びない。

繁栄と滅亡は裏表。繁栄なんかしないで続けていくことが大事。

いらんといえば不自由しない。欲しい欲しいといえば不自由するだけ。

〈教育〉

人間をつくることが一番大事なことだ。

人を作るのに10年はかかる。金の世界はすぐに結果が出る。

自然が教えてくれる。勉強する必要はない。

教えるものではない。(教えてわかるものではない)

物を教える人には(本質が)わからない。

先生は教えるからダメ。教えられたことは定着しない。

教えてもダメ。その人が自らが付かないと。



教える必要はない。教えなくても自然に分かるようになる。

教えることは人間を悪くする。

自分で生きていくことを学ばせる。

教えてはダメ。向こうに教えられる。

出会ったものから学ぶ。

体で勉強する。

手で覚えたことは一生覚えている。

手を使う。他人のためにやる。

頭はできるだけ使わないほうがいい。

人間は勉強して、できることをできなくしている。

人間は勉強して馬鹿になってしまった。

親が子供を育てようとしてダメにしている。

親を直さないと子どもはよくなるらない。

大人は子どもにウソを教えている。

勉強にお金はいらぬない。頭で勉強した人はお金がある。

勉強すると間違える。

今は何をやるにも資格だ。昔は大工も石工も全部自分で学んだ。

会社は従業員をつくる。社会は人間をつくらなければならない。

向こうから教わることが大事。稲作も稲に教わってきたから何千年も続いてきた。稲に教わる・使われなければ。

煩惱があるのは人間だけ。動物に教われればいい。

怒ってはいけない。怒ると相手にカゲ・ヒナタができる。

子どもに危ないことを教えなくなってしまった。今が一番怖い時代。

知っているとなんでも心配になる。知らないほうが安気がいい。

教えれば陰で悪いことを言われる。

〈もうけ〉

生きていればもうけだ。明日朝、生きていればまた1日もうけたことになる。毎日がありがたい。

もうけはどこにでもある。拾う人と拾わない人がいるだけ。すべてをもうけにする。

世の中に広く貯金する。すべてをもうけにする。

〈財産・金・宝〉

人が財産。

人間という財産には税金はかからない。

おれは金がないから皆が助けてくれる。

人に来てもらえるのが財産。こうしてあなたたちが来てくれるのはありがたいこと。自分たちでやってもらっては困る。こちらがやらせてもらうからありがたい。人に使われるのがいい。使ってもらえることが一番の財産。人から頼まれなくなったら終わりだ。

出会いが財産。人間の力ではない。巡り合わせは輪廻。

目に見えないものが一番の財産。

本当の宝は見えない。

本当の財産は目に見えない。目に見える財産は魔物だ。

死んだときに全部置いていく。生きているうちに使って回さなければダメ。

すべては借り物。生きているうちにすべて返していく。

この世で返していくと褒められる。

お金は木の葉っぱみたいなもの。

物が豊富になるほど人間は貧しくなる。

物がなくなれば変わる。

物があるうちはわからない。

自分のために使おうとしているからいくら金があっても足りない。

金は地獄には持っていけない。こっちで金を使った人は地獄で楽しめる。

金はこの世で使うと役に立つが、あの世では使えないらしい。

金は使えるうちに使え。死んで（残してやって）も、ありがとうとは言われない。

自分の金は残さない。

金がなくなったら失敗することはない。

金が必要。使い方が間違っている。

お金で世の中がダメになった。

借金はないところからはとれないらしい。ない人は助けられるだけ。

貧乏することは大事だ。よく働くようになる。

貧乏だから宝物が集まってくる。

世の中という大きな銀行を持つと、世界中の人が利息を持ってきてくれる。

財産はいくらでも転がっている。拾わないだけ。

他人のもので生きられる。

子どものために金をためないようにする。お金の感覚は0。

人は、ほしい、えらくなりたいという苦しみを負っていつも不自由している。

#### 〈経営〉

雲峰荘では13人が働いている。いてくれる人が財産。

従業員に教えたことはない。世間の人を教えてくれる。従業員は自分をいじめるしかない。

社長が朝早くから働いていると、「社長がかわいそう」といって従業員が変わっていく。サービス業はもうけようとするからつぶれる。人間を相手にしようとするれば人が来てくれる。来てくださいと言ったら商売は続かない。相手に使われるから商売が続く。オレ、オレ。オレがやっている間はダメ。喧嘩だつて相手がいなければできない。向こうに使ってもらおう。

おてんとうさま、水……。自然に使ってもらおう。自分がやろうとすれば苦勞する。かたちのあるものはなくなる。自分のものではなく、法人にしておく。

#### 〈農業〉

工業製品はなくても米はある。

日本が一番大事なものを作れなくしている。

#### 〈補助金〉

ただの人（お金をもらわない人）は持つ。

補助金をもらう人は補助金がなくなるとやめてしまう（続かない）。

補助金はあるうちだけ。なくなればつぶれる。

生活保護すると働かなくなる。他人、国に依存するようになったら直しようがない。

補助金をもらおうと〇〇協会では偉くなれるが、もらうことしか知らなくなる。

世の中は金で減じる。

〈政治〉

政治というものは陽の当たらないところに陽を当てるもの。

できないことをできるようにしてやるのが政治。

行政は自分のような者は相手にしない。

法律が一番悪い。法律がなければ悪い人はいない。

〈政治家・マスコミ〉

政治家やマスコミは本当のことはわからない。本当のことを言う人はいない。商売しているだけ。付き合わない。

政治家を選んだ国民が悪い。政治家は悪い人に出会うのが仕事。ウソをつかないとやっていけない。

〈国〉

この国はつぶれたほうがいい。

国も政治家ももつと貧乏になったほうがいい。

〈科学技術〉

文明、科学、経済の中に幸せはない。幸せは貧しい中にある。

科学と文明そして金で人間は滅びる。



〈原発〉

うまいこと言ってだます。絶対に安全、なんてありえない。金をかけるだけ。しかもその金は国民の税金だ。

〈その他〉

自分は、使ってきた人間を3人も事故で死なせてしまった。自分が全部悪い。

オレが悪い。放火ではない。警察・消防も内部資料だけで処理してくれた。

(\*2015年2月10日、洗心道場を火事で焼失。程なく皆が力を合わせて再建)

自分の手で作ったものだから、どうっていうことはない。

人間は自分で心配を作っている。家は50年も100年も持つ。なるようにしかならない。名前を出さない。自分のものにならない。

人のためにやっているからうち(雲峰荘)には人が来る。塩山では一番入湯税を払っている。

介山記念館も頼まれるからできる。四国の坊さんから頼まれたもの。

(洗心道場も介山記念館も)自分のものにならないから残る。

自分が死んで50年たてば価値が出る。

《非売品》

〈本書についての問い合わせ等連絡先〉

〒2002-0023 東京都西東京市新町5-9-4

電話・0422-55-7278 (FAXも同じ)

Eメール・aitsutaya@gmail.com

(はじめのaの次は数字のイチ)

蔦谷 栄一 (つたや・えいいち)

表紙・蔦谷 政子

写真協力・林さんのご家族

DTP・校正・蔦谷 信子